

「新しい生の方向性」

マタイによる福音書 第2章 7節～12節

説教 本庄 侑子 牧師

「学者たちはその星を見て喜びにあふれた。」(マタイによる福音書 第2章10節)これは、非常に大きな喜びを喜んだという、くどい位の喜びの表現です。それまで経験したことのない喜びだったのでしょう。学者たちには旅の疲れがあり、そして再び国に帰るための長い旅が待っていたはず。しかし、それらを忘れてしまうほどの喜びに溢れました。そこに主イエスがいてくださる。それだけで十分でした。彼らはひれ伏し、宝物を捧げました。

学者たちは星の動きを解明し、運命を読み解く仕事をしていました。しかし、星の動きは解明できても、なお解明できないことがあり、恐れや不安のある日々を過ごしてきたのではないのでしょうか。学者たちは、足元に平伏しても良い“何か”を求めて人生をかけた旅に出たのではないのでしょうか。そしてついに出会ったのです。人生の全てを委ねていいお方、主イエスと出会いました。

この時、学者たちが経験した非常な喜びは、代々の教会が経験してきたことでもあります。私たちもそうです。疲れや困難を抱えながらも、ここに集っています。礼拝したからといって困難がなくなるわけではありません。しかし、礼拝には主イエスのみ声が響いている。疲れや困難、死でさえも、主イエスに現された神の愛から私たちを引き離すことはできない。そう知らされて、全てを神に委ねて生きる力が注ぎ入れられます。そうして、主への感謝と愛が溢れだし、ひれ伏して私たち自身をお捧げして、新しい週の歩みへと踏み出します。この礼拝に比べられるものはないのです。

私たちの週ごとの歩みは、この主イエスに出会う旅路です。そして、そんな週ごとの旅を繰り返しながら、最終的には文字通り、主イエスと顔と顔を合わせてお出会いする終わりの日へと向かっています。私たちの人生も、世界の歴史も、主イエスに出会うための旅路なのです。

この旅路の中、礼拝から送り出される日々の生活も、新しく作り変えられていきます。学者たちは、主イエスと出会った後、ヘロデ王の命令に従わず別の道を通って帰って行きました。時の支配者の命令を無視するという、常識では考えられないことをしたのです。言う通りにしていれば与えられたであろう報酬にも目も留め

ませんでした。彼らは、東の国で地位や名誉を得て生きていた時には得ることのできなかったもの、天からの喜びと平安に満たされ、新しい生き方へと押し出されていきました。主イエスと出会う時、神にのみ信頼するという新しい生がやってきます。神の導きに人生全体を委ねるようになる。

そうして始まる礼拝生活は、喜びに満たされて終わりではなく、捧げる生活となります。学者たちが捧げた黄金は王なるキリストを、乳香は大祭司キリストを、没薬は贖い主キリストを指し示すものだと言われています。彼らがこの意味を知っていたかは定かではありません。しかし、喜び溢れて捧げたものが、後の時代を生きる人々にキリストがどのようなお方であるかを指し示すものとして用いられることとなりました。

彼らは、それらを使って星の動きを解明し、人々を助けてきたのでしょうか。しかし、その時には決して成しえなかった偉大な業が、神に捧げることによって成されていきました。新しい誰かが、主イエスがどのような方であるかを知り、礼拝の喜びに加えられるために、神は私たちの捧げ物や私たち自身を、豊かに用いてくださるのです。

学者たちを主イエスのもとに導くために、神は特別な星を用意なさいました。しかし、彼らは途中で星を見失っています。ユダヤの王宮に立ち寄り、そこに導きを求めました。星よりも輝いて見える煌びやかな王宮や、目に見える支配者に捉えられたのかもしれない。ヘロデ王は、幼子イエスを探し出し、自分の支配下に置くために、学者たちを利用しました。そうして学者たちは再び王宮を出て、旅に出ることとなりました。

特別な星は彼らを待っていました。彼らが王宮を出る姿を確認するようにして、再び先立って進み出しました。神は、私たちの不信仰も、あらゆる妨げも、ものともせず、私たちを主イエスに出会わせ、非常な喜びに満ち溢れさせてくださるお方です。そうして喜び溢れる私たち自身を受け取り、新しい誰かをこの喜びに加えるため、豊かに用いて下さるのです。

(記 説教要約奉仕者)